二松學舍
松苓會
東京支部報

コロナ禍の続く令和五年を迎えて

支部長　矢澤　喜成（50文）

東京都支部の皆様、明けましておめでとうございます。

斯くして新年の御祝を申し述べたものの、新型コロナウイルスによる感染は未だ終熄が見えず、自ずとそこに話題を移さざるを得ず、心苦しい限りです。

二松學舍創立一四五周年を迎えた昨年には、斯様な状況に在りながら、皆様の御協力を得て、東京都支部の総会・講演会（詩吟と朗読の会を実施）を盛況裡に終える事が出来ました。

感染状況に鑑み、申し合わせにより、支部間の交流は控えて居りますが、神奈川県支部も何とか総会を開き、千葉県支部は、総会・講演会に加えて、文学・歴史散歩や懇親会も持たれたとの事です。

また、岩手県支部の宮本義孝支部長（32文）より、励ましの御手紙を戴きました。宮本先輩には、いつも岩手県支部報「翰」を御送り戴き、その思索的な文章に引き込まれて居ります。

大分県支部の甲斐啓一郎支部長（52文）からの激励の御便りも戴きました。

今年こそ、東京都支部の文学・歴史散歩や懇親会を再開し、その際には、より多くの会員の皆様の御参加を戴き、皆様との有意義な時間を持ちたいと存じます。

そして、支部間の交流も広めたいものです。まだまだ続くコロナ禍、会員の皆様、御自愛下さい。

若き日の正月の思い出

顧問　井上　和男（42文）

私は高校卒業後、製鉄会社（現新日鉄名古屋製鉄所）に入社し運輸課という部署に配属された。運輸課にはいくつかのセクションがあり、私は、クレーンで船舶から石炭や鉄鉱石を荷揚げする作業を行う、運輸掛の一員として先輩方にクレーンの操作を教わりながら作業に従事した。

その時、運輸掛長の下には三十数名の部下がいた。

年が明けた正月元旦、先輩が「三浦掛長宅に年始の挨拶に伺う」というのでついていき、部屋に案内されると、長机の上に大量のおせち料理が所狭しと並べられていた。やがて、続々と社員が詰めかけ、飲めや食えやの大宴会となったが、三十数名の社員をもてなす掛長夫妻の〝優しさ〟に感激した。今でもその時のことを思い出すと胸が熱くなる。

その後、私は二松学舎大学に奉職し、部長になっていた。

私は、後輩である部下にも私の体験した〝ぬくもり〟を味わって欲しいと思い、十数名の部下を拙宅に招き、「新年の集い」を主催した。

幸い、彼らは殊の外、喜んでくれ、互いに談笑し、絆を深めて帰路についた。

私は、彼らの喜々とした表情を目の当たりにして何とも言えない充実感を覚えた。

その後も毎年、場所を変えて、この会を催したが、その都度、私の心は満たされた。

後輩を育てるという意味を考えさせられる新年である。

新春を寿ぎ　心よりお慶び申し上げます

東京支部役員一同

顧問	井上　和男	（42文）
相談役	菅根　順之	（24文）
支部長	矢澤　喜成	（50文）
副支部長	星野　優子	（42文）
同	大山由美子	（47文）
幹事長	片山　聖英	（50文）
監事	大渕　俊明	（50文）
同	渡辺　大雄	（65文）
事務局長	中原　敬二	（62文）
常任幹事	畠山　幸治	（37文）
同	神河　秀春	（47文）
同	髙柳　幸雄	（49文）
同	齋藤　祐一	（51文）
同	菅原　義博	（53文）
同	高橋　映子	（53文）
同	山口　洋子	（54文）
同	原　由来恵	（63文）
同	荒屋　陽子	（85文）
同	平井　領	（75政）

特集 もじもじしないで 文字を考えよう

――文字に関することを集めてみました――

二松学舎大学の書道

常任幹事　高柳幸雄（49文）

千代田校舎の本館四階に上がると墨の香りがした。四〇四書道教室では、いつもだれかが練習をしていた。

私が入学した当時の書道研究室には金子清超、石橋犀水、堀江秋菊、服部北蓮、貞広観山、難波清邱、浦野黛岳、寺山旦中、富岳凌雲、今関脩竹、源川彦峰の諸先生方がいらした。

金子清超先生は、昭和三年に開校した二松学舎専門学校一回生である。卒業後、泰東書道院の創設に関わり、同九年に二松学舎専門学校教授、二松学舎大学教授と、同五十四年三月まで約半世紀にわたり二松学舎の教壇に立たれた。自詠自書を唱導し、後進の指導に当たり、清真書道会を主宰した。本学が使用している筆文字の「二松學舍大學」は、金子先生の揮毫による。

石橋犀水先生は、東京美術学校講師・新潟大学教授を経て、昭和三十六年から同五十四年三月まで二松学舎大学教授として教壇に立たれた。

書を西川萱南・比田井天来に師事し、財団法人日本書道教育学会を創設。日展、毎日書道展の審査にも当たった。金子清超先生と共に二松学舎大学の書道専攻の礎を築き、書道教育の振興に尽力された。

石橋先生が師事した比田井天来は、「近代書道の父」といわれた人物で、明治三十一年に二松学舎に入塾して三島中洲先生に漢学を学び、書を日下部鳴鶴に師事した。

独自の筆法「俯仰法」を考案し、書の芸術表現の進展を目指した。東京高等師範学校・東京美術学校等で教壇に立ち、大日本書道院を創立し、初の帝国芸術院会員となった。多くの門人を育て、高弟に戦後の書道界に大きな影響を及ぼした上田桑鳩がいる。この人物も二松学舎の卒業生である。

本学の書道教育の根底には、自然と三島中洲先生の教えが息づいている。

手書きのよさ

常任幹事　山口洋子（54文）

最近はデジタル化が進み、手書きの文字を目にする機会が減っている。それでもまだ、時折いただく手紙や年賀状、贈り物の宛名書きなどで、手書きの文字を目にすると、温かみを感じたり、急に懐かしくなったりする。

手書きの文字は魅力のかたまりだ。なんとなく、その人らしさが、にじみ出ている。書いた瞬間のようすを想像する。どんな気持ちで書いたのか、急いでいたのかな、緊張しているのかな。それが不思議と相手に伝わることがある。

手書きの文字には、手間がかかってしまうと考えて、ビジネスの場面では好まれない。印刷物の読みやすいフォントの方が適している場面は、確かにある。メールでのやりとりの方が簡単に、かつ迅速にできて、便利である。さまざまな筆文字の書体もあり、賞状書きの仕事もコンピュータに取って代わられつつある。だからこそ、私にとっては、手書きの文字が貴重に感じられてくる。

もしかしたら、美しく丁寧な文字を書けるということは、今後生きていく上で、必要不可欠なスキルではなくなっていくかもしれない。

ところで、手書きの文字はペン書きに限らない。本学の大学資料展示室・附属図書館では、本学にゆかりのある書作品、資料を中心に作品収集を行い、公開している。また、都道府県の作家の直筆原稿を収集している。これらの作品を保存すること、またそれらを見て感受することにも意義がある。これからも、文字を通じて心の機微に触れることを願っている。

若者よ、文字を

常任幹事　平井　領（75政）

世界で最も古い文字と言われるエジプトのヒエログリフ、中国の甲骨文字、「目には目を、歯には歯を」のハンムラビ法典でお馴染みの楔形文字などは五千年前から三千年前くらいに存在したと言われている。文字の歴史はとても興味深く、クレタ文明の線文字Ａやインダス文明のインダス文字など、今だに未解読の文字もある。また、今日英語など多くの言語で使われているアルファベットはフェニキア文字を起源としているのも有名な話だ。

ところが近年、三人に一人は文字を書く必要に迫られない日が半年以上続いているという調査もあるらしい。いわゆるＺ（ゼット）世代と呼ばれる世代（概ね一九九〇年代中盤から二〇一〇年代序盤までに生まれた）はデジタル、スマホ、ＳＮＳネイティブなのです。

若者たちよ。頑張れ、負けるな！　もじもじしないで文字を書け！　学び舎（や）で手書きのレポートを何枚も書いていた時代を懐かしみ。アプリサークル最高！

「文字」は思考整理のツール

常任幹事　荒屋陽子（85文）

「文字」について考えた。私は普段から手書きで文字を書くことのほうが多い。職場の机上には常にメモ帳があり、胸ポケットには毎日ペンを刺して、スケジュール帳には携帯用のシャープペンシルとA6サイズのノートを挟んでいる。この小さなノートには適当に開いたページにいろんなことを書き綴っている。読んだ本のメモや落書き、買い物リスト、電話中のメモ、セミナーや講演会の備忘録、考え事をしていた時のメモ、謎の計算や数字の羅列なんかもある。

私の中で、「文字」とは思考整理のツールだ。なんだかよくわからない「もやもや」を文字にする、という作業を経て「そういうことか」と納得する。思いついたことを適当に書きなぐるには手書きのほうが便利、というわけだ。スマホやパソコンなどのデジタル機器は、自分の中でまとまったものをあとに残すつもりの時に使うことが多い。しかし、スマホのアプリの中で唯一手書きでの思考に近いものはTwitterではないかとも思う。しかも手書きの時とは違い、まとまらないまま勢いでツイートをすると誰かがリプライをしてくれて思考がまとまることが稀にある。見ず知らずの、距離的にも年齢的にも離れた第三者と文字を通して交流につながる点は面白い。

手書きの文字から性格が垣間見えるのも面白い。誕生日に届いた母からのメッセージカードには全体的に大きく丸い、おおらかでポジティブな母らしい文字が並んでいた。先日、久々に姉の字を見たが、彼女の几帳面で真面目な性格がそのまま反映された細かな文字だった。父の文字は、一画一画は力強いのにどこか繊細さのある右上がりの字。改めて自分の文字を見返してみると、ノートの罫線を無視した大小さまざまな字がいろんな方向に散っている。うーん。もしかしたら自分が一番気難しい性格なのかもしれない。

ああ原稿、まとまらない。

そうかー、今回は手書きせずに、いきなりパソコンで打ち始めたものだからかなぁー。

鷗外にも『言海』あり

常任幹事　齋藤祐一（51文）

文学者になろうと思ったら、大学などへ入らずとも、『鷗外全集』と『言海』を、三、四年くり返して読めばいい――。こう述べたのは永井荷風である。文字やことばづかいに、とりわけ厳格な鷗外その人も、『言海』を座右に置いていた。

晩年、津和野町歌の作詞を依頼された鷗外は、病を理由に、同郷の佐伯常麿（さえきとこまろ）に任せた。出来上がった草案を見ると、「天の下をも靡（なび）けてむ」と、「靡く」が他動詞（下二段）で使われている。

これに疑問を感じた鷗外は、『言海』を見ても、「靡く」は自動詞（四段）とあることから、この一節のみは書き改めた。

確かに、『言海』に他動詞の「靡く」はない。だが、すでに『保元物語』や『太平記』などには用例がある。この二つの作品を含め、佐伯は多くの校注書を刊行した国文学者であり、「靡く」を他動詞で使うことに、違和感はなかったと思われる。

それでも、この文豪をまえに、もじもじと尻ごみしたわけでもあるまいが、異を唱えることなく、訂正を受け入れたのだった。

かつて荷風から、鷗外と並び称された『言海』であるが、他動詞の「靡く」が立項されるのは、『大言海』（昭和七年）への改訂を待たなければならない。

今年（令和四年）、生誕百六十年、没後百年を迎えた鷗外には、むろん知るよしもないことであった。

文字を「書く」こと

常任幹事　菅原義博（53文）

昨今、私たちの生活の中で、文字は「書く」ものではなく「打ち込む」ものに変わって来た。スマホやパソコンが紙とペンにとって代わり、連絡はメールになり、手紙などほとんど書かなくなった。加えて漢字に変換してくれるので、めっきり漢字を忘れることが多くなった。小説家などもパソコンで執筆する人が多いだろうから、将来的には作家の直筆原稿などというものも無くなってしまうのかもしれない。手書きの文字には、その人のキャラクターが出るという。強面なのにかわいい字だったり、逆に意外と大胆な字だったり。そういった驚きを感じることも少なくなってきた。文字に限らず、様々なものがアナログからデジタルに移行して便利になることは歓迎すべきことである。だが、一方で「味わい」のようなものを失いつつあるのではないかと感じることがある。例えば趣味の世界においては、そのプロセスを楽しむところに醍醐味があり、贅沢さを感じることも多い。あえて手間暇を楽しむのだから、人間とは面倒くさい生き物である。最近、若い世代の間でもアナログな趣味にハマる人が増えていると聞く。今後、「入力ネイティブ世代」にとって、日常的に文字を書くことは特別なことになっていくのかもしれない。

けれども、手書きの文字はそう簡単になくならないであろう。

合縁奇縁シリーズ③

出会いの縁を感謝しつつ

風口和雄（50文）

平成二十七年の夏に秋田県に来てから、七度目の冬。除雪のやり方にも少しずつ慣れてきました。

秋田で生活する前は、浜松の現聖隷クリストファー高等学校に三十五年間勤務していました。今振り返れば不思議な縁なのです。

大学在学中、私は剣持武彦先生のゼミに所属し、近代文学を専攻していました。四年生になり、卒業後の進路を先生に相談したところ、先生から佐古純一郎先生を紹介されたのです。そして佐古先生の仲介で当時の聖隷学園高等学校に行くことに決まり、教員としての第一歩を踏み出したのです。そのころを思い出すと、よく頑張ったと思う反面、力不足を感じ、赤面するほどの思いです。

教員ならば、クラス担任、授業、部活動が大切と考え、毎日元気（やんちゃ）なクラスの生徒と対峙し、放課後、土日はテニス部の顧問として一緒になって汗を流しました。

そうしたテニスを通した生活の中で、多くの県内外の顧問の先生方と知り合い、自分自身を成長させることができたのも出会いという縁でした。

そして実は、この縁によって秋田の生活が待っていたのです。

秋田には、親戚を除けば、知り合いは一人もいません。

テニスで出会った方々のお陰で、軟式テニスの盛んな秋田県に行くことになったのです。

テニス関係の方から、今まで顧問をやっていた先生が教頭になり、校務多忙のため、補助してくれる国語科の先生を探しているというのです。

そんなことがあるのかと思いましたが、話が進み、秋田県に来ることになりました。その後、生徒たち出場選手達によってインターハイや選抜大会、それに伴う予選で東北六県にお邪魔させていただき、交流を深めさせていただきました。

現在は、授業だけとなりましたが、多くの出会いのご縁に感謝し、微力ながらなんとかお役に立てるように日々を過ごしています。

特別寄稿

文字教育について

書家　原田佐知子（準会員）

日本の文字教育は今二つの問題を抱えています。

まずは日本人の85％程が自分の書いた字に劣等感を持っているということです。

日本の文字はそれ自体が芸術性を持っているため、ある程度の美しさを求められてしまいます。美文字を書くには、見て覚えても腕には伝わりません。ひたすら練習を繰り返す（毛筆と硬筆の両方）しかありません。義務教育の期間はしっかりと教えていただきたいと思います。美しい字が書けるということは終生身につく資産です。「私は字がヘタで」という人を少しでも減らしたいものです。

第二の問題は筆による仮名文字・仮名書きのことです。仮名は申すまでもなく日本独特の文化です。

最近、これを「世界文化遺産登録」に申請したところ、却下されました。

なぜかと言うと、日本人の多くが筆書きの「仮名」を読むことも書くことも出来ないという情けない理由からだったのです。

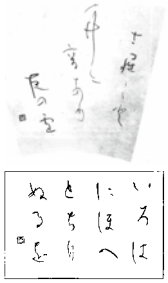
この分野の教育は学校ではほとんど行われてはいません。書道を志した人が勝手に学べばいいということではないのです。早くから教えていけば出来るはずなのです。子供の脳は秀れていますからね。

仮名書は、線と余白の美です。読めなくてもなんとなく「美」を感じるものです。日本人の身体の中に、これを愛でる血が流れているからだと思います。

この欠落部のある教育を、このまま放置していいのでしょうか。

パソコンが発達した今、益々退化してしまいます。

どのように継承していけばいいのか。教育現場の方方にもお考えいただきたいと思っています。



揮毫は
原田佐和子氏

卯年を迎えて

副支部長　大山由美子（47文）

十二支の四番目「卯」、この漢字の成り立ちは、同形のものを左右対象においた象形文字「卯」。動物では兎に当て、その数え方は二通り。今は「匹」が一般的だが、鳥に擬して「羽（わ）」と数える慣習もある。獣を口にできない僧侶が二本足で立つ兎を鳥類とこじつけ食したからという説、兎の大きく長い耳が鳥の羽に見えるためという説などなど。

また耳が長いところからロバは「兎馬」とも表す。

宇治川にかかる朝霧橋を渡ると、兎に縁のある宇治神社の鳥居が見えてくる。御祭神は、第十五代応神天皇の皇子、菟道稚郎子命（うじのわきいらつこのみこと）。皇子が河内の国から宇治に向かわれる途中で道に迷われた時、一羽の兎が振り返りつつ先導したという故事が伝わる。神使いの兎が道案内したことから兎の道、兎道（うじ）が宇治の地名に由来するそうだ。手水舎では兎がお出迎え、絵馬や御守の兎も愛らしい。願かけの特別な参拝「うさぎさん巡り」で御利益を授かりましょう。

特別寄稿

「凹まない話」

市川中学校・高等学校副校長　熊谷勝広（50文）

昔話である――二〇〇一年五月九日の深夜、四度目の高三担任を背負った四二歳が、日付変わり、かれこれ二時間にならんというのに、机上に置いた右の「文字」を、なおもじりじりと見つめていた。「アブナイSENKO」と後ずさることなかれ。学級通信『空をかついで』のネタに、今宵もまた呻吟する、〈麗しき教師生活〉の一コマである……。

さらなる昔――二松学舎で左手に筆を持ち、辛くも「可」にて、書道単位を修得した身。されば「文字」を論ずるなど適わぬことなれど、つらつら想いを巡らすに、そもそも文字は、その「かたち」をもって、自ずといずこへか流れ出すエネルギーをもつ。

むろん、「田」の文字は静謐。シンメトリーゆえ、エネルギーは、文字の内に沈淪する。では、「左」や「馬」はどうであろう――「左」からは、「ノ」（左払い）によって右へ動かんとするエネルギーを、象形文字の「馬」からは、たてがみを揺らして左上へ跳ねんとするエネルギーを、感じないだろうか……。

さても件の「凹」。図形と見紛うこの文字は「へこむ・くぼむ」と読む。中央のへこみには、確かに上からの重苦しい圧力を感じるが、しかし見る者はやがて〈大いなる逆説〉に呑み込まれていく。すなわち――へこみを象ったこの文字は、決して弱々しくない。へこみを逞しく受け止めながら「凹」の「両肩」に乗ったエネルギーが、真っ直ぐに上へと伸びているのだ。

潰れぬかぎり、破れぬかぎり、人はどれほど凹んでも、上に向かうエネルギーを秘めている。しかも凹みが深いほど、上昇力は強い。

人の一生は、多くの逆説で満たされている。逆説を含まぬ人生が、幸福であるとは思えない。世を照らす偉大な人間性は、ある種の悲惨さと共存せずには、ありえないだろう。――実は潰れた。そして破れた。それでもなお生かされた、六〇有余年であった……。

プーチンと武道

幹事長　片山聖英（50文）

ロシアを代表する格闘技に「サンボ」がある。これは帝政ロシアの軍人ビクトルがボクシングと柔術から編み出したもので、武器なしの自己防衛術という言葉の最初の語をとって名付けられている。生き残るため相手を制する武術である。

一九五二年生まれのプーチン。貧家に生まれ、不良少年で、けんかに明け暮れる生活をしていた。小柄であったので、強くなりたくてサンボ道場の門をたたいた。

少し強くなって自信を得たとき、サンボにはもう一つの流れがあることを知る。

それがサンボ柔道と呼ばれるもので、サハリンから牧師として日本に渡り、嘉納治五郎のもとで柔道を学んだワシリーという男が伝えていたのだ。

そこでプーチンは柔道に初めて触れる。すると「礼」から始まる稽古に驚く。

プーチンは、この柔道というものを続ければ、品格ある人間に自分もなれるのではないかと思うようになる。

精神の向上に重きを置く日本の武道に日本人の哲学を見出していたのであった。

そのプーチンがなぜ戦争を、という疑問が湧くが、精神世界のことを単なる綺麗ごとと受け取っているようだ。つまり理想と現実は違うという解釈なのである。

嘉納治五郎の思想として創出された柔道の精神。その柱は「精力善用・自他共栄」で、自己を鍛え養って世の中の発展に貢献し、自他共に繁栄することである。

それはあくまでも理想で現実味のないことなのか。

日本では言葉を掲げる思想がある。プーチンは山下泰裕から「自他共栄」を、安倍前首相から「精力善用」の治五郎直筆の掛け軸をもらっている。それはロシアでは掲げられていないのか。

ウクライナのキーウ。破壊された建物の壁にバンクシーの絵が描かれた。

我々は今、臆することなく理想とすべき言葉を掲げるべきであろう。

バンクシーの絵

鉄板に文字を書く

事務局長　中原敬二（62文）

文字というと食いしん坊の私は文字焼が連想され、もんじゃ焼きへと展開していく。東京生まれであるが、子供の頃ウチのエリアには「もんじゃ」の文化はなかった。他学区の友達が、駄菓子屋でもんじゃを食べているという話を聞いて、羨ましく思っていたものだ。

もんじゃを初めて食べたのは沼南校舎（当時）に通っていた大学一年の時。既に閉店してしまったが、柏駅バス乗り場近くの店で美味いというよりは面白い食べ物だと思った。我が家の東京でのルーツは曾祖父が月島に引っ越してきたからで、戦後現住所に移ったが、月島が原点であればもんじゃを極めなければと思った。そういうわけで、私のもんじゃは直接流して焼く「あらかわ」型でなく土手を作る「月島」型である。

熱々のもんじゃをぺちょぺちょ、時にぺりぺりに焼いて食べ冷たいビールで流し込む！　最高であるが、糖質制限中のため、ここ数年食べていないのだった…。

尊敬の助動詞に関する一考察

監事　渡辺大雄（65文）

言葉の表現として、ここでは「来られる」が尊敬の使い方として正しいのか否かを考えてみたい。

「来られる」は動詞「来る」に助動詞「られる」が接続した表現である。助動詞「られる」には、「尊敬」の他に「受身」・「可能」・「自発」がある。

用例を挙げると、①「忙しいときに遊びに来られて迷惑だった。」（受身）

②「明日の会議に来られますか。」（可能）

③「来られる際には公共の交通機関をご利用ください。」（尊敬）

①・②では、文脈によっては尊敬の意味としても捉えられてしまう可能性がある。「自発」の用法は、「尊敬」と誤解されることはないので用例を挙げていない。

この「られる」は、結局のところ助動詞（付属語）であるため、本来の尊敬の意味を強めるには、敬語の尊敬語を用いたほうがよい。

尊敬の意味を表す「来られる」の言い換えの敬語表現としては、①「いらっしゃる」・②「お越しになる」・③「お見えになる」・④「お出でになる」がある。②・③・④は尊敬語の「お～になる」という公式に当てはめたもので、決して間違いではないが、①の「いらっしゃる」のように初めから尊敬語の意味で示されているものを使用したほうが望ましいと言えよう。

結論としては、「来られる」は誤りではないが、誤解を避けるために「いらっしゃる」を使用したほうがよい。

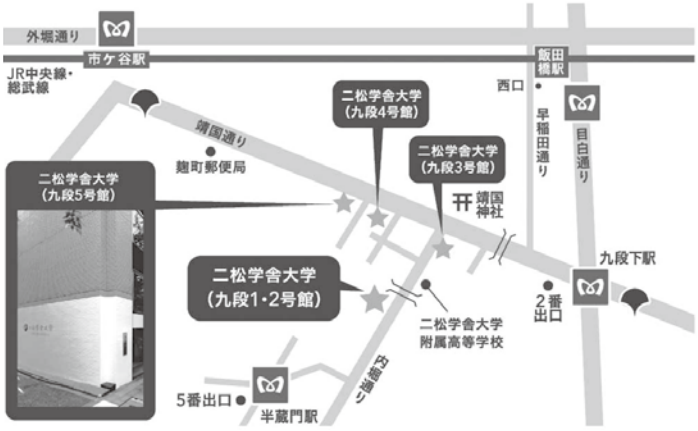
大学と松苓会共催　ホームカミングデーのお知らせ

今年度のホームカミングデーは、新型コロナウイルスの感染状況を鑑みて、昨年同様ホームページ上で開催されることとなった。

各種動画に加え、WEB写真展、クイズなど参加型のコンテンツもある。公開は二〇二三年二月頃になる予定。なお、現在も昨年度のコンテンツは掲載されているので、是非見て下さい。

二松学舎大学HP
⬅
卒業生の方へ
⬅
特設ページ

創立145周年記念に、メモリアルプレートが正門横に設置されています。



▲九段キャンパスは現在5号館まであります。
落ち着きましたら是非巡ってみて下さい。

東京支部事務局から

事務局長　中原敬二（62文）

令和四年九月から令和四年十一月までに年会費を納入していただいた方は次のとおりです。感謝申し上げます。

年会費納入者一覧

家永　修（44文）
伊藤　肇（59文）
大渕　俊明（50文）
斉藤ゆかり（51文）
齋藤　祐一（51文）
齋藤　曜子（57文）
杉江　訓子（47文）
鈴木　龍男（44文）
数見　等（43文）
髙柳　幸雄（49文）
塚本　紘實（33文）
寺澤　紀子（54文）
外池奈保美（56文）
丸山　裕（57文）
町　泉寿郎（60文）
望月　貴司（53文）
渡辺　大雄（65政）
釋　忠輔（85政）

編集後記

ワールドカップでの日本の躍進が誇らしいばかりであるが、勝利したことだけではなくて、ロッカールームの片付やスタジアムの清掃など、日本人の清々しさが話題となり、その対応が他国への刺激となっている。

Jリーグができて、30年。すでにその歴史は一世代となるが、確実に次の世代に引き継がれて、世界と戦うことが当然となっていることなどから育てられた選手たちの強靭な心理と技術は素晴らしく、その背中を我々に見せつけている。

翻って、我が国の政府の方々は、いかがであろうか。

政治の世界の先輩たちの背中を見て育った今の方々の不祥事の連鎖は、どういう背中を見ていてのことかと落胆すること頻りである。

後輩たちに、私たちはどういう背中を見せているだろうか。心許ない新年である。

（片山　50文）

◆発行◆
二松學舎松苓会
東京支部　事務局（中原）
電話 090・7941・5116